

巻 頭 言

創価教育の根幹に関わる牧口の人生の在り方

会長 長島 明純

(創価大学教職大学院教授)

牧口は若くして、様々な関係に支えられ生きている人間を、地理的環境との関係で考察し、「人生地理学」という本を出版しておりますが、後年、様々な関係に支えられて生きている事実を、主体と客体との関わりという意味で価値という言葉で示し、その教育学の根幹に据えた、「創価教育学体系」を世に問うております。

その創価教育学体系の中で牧口は、子どもたちが、幸福になることが目的であり、幸福な生活を創るのは、学習者自身であるとしております。

苦学して自らの教育者として人生を切り拓いていった牧口は、子ども自らが能動的に主体的に学ぶという事の大切さや社会にあって子どもが幸福に生きることの難しさと大事さを、身をもって学んでいたのではないのでしょうか。

そのために牧口は、それまでの詰め込み教え込みの一律の教育ではなく、多様な子どもたちが、まわりの環境（ひと、もの、こと）との関わりの中で、各々の生命価値を追求し、創造できる、価値創造力を培う教育を志向したのではないかと私は考えております。

生命の本来の素晴らしい力を教育によって、開華させていく。そのことによって、一人一人が向上し、幸福になっていく。幸福をつかんでいく。また、そういう社会、時代を創るという力に、教育というものが貢献していきたい。そこに牧口の創価教育への熱い思いがあるように思います。

牧口は「対象が我々に対立してわが生命に関係を有し、我が生命の伸長に力を与えるものを価値ありとするのである」としてしておりますが、主体と客体、自他が関係を結び合うことから生命は存在しているとの眼差しで、学校における教育活動を見るならば、教師の役割は、子どもたちにとっての最大の教育環境であり、子どもたちを教師が教育するという、一面的な側面に留まる事を良しとせず、教師である前に一人の人間として、子どもたちや環境（ひと、もの、こと、など）と関わり、成長し続けることが教師に求められます。

教師は目の前の子どものための教育のためにも、教育をも含むより広い社会と交流し、その社会への貢献を通して、成長していかなければならないということを、牧口はその人生の在り方から教えてくれているのではないのでしょうか。

一人一人には素晴らしい生命があり、その生命はいろいろな環境との関係性の中で、環境に支えられながら、またその環境を生命は支えている。このようなケアされ、ケアする往復作業を通して、生命は鍛えられ、その生命価値を創造していると、牧口の人生の在り方は教えてくれているように思います。

事実、牧口は、教育関係以外の人との交流、対話、学び、貢献を大切にしておられました。その事は、彼の著書である、「創価教育学体系」の発刊に序文を寄せた人々の名前からも推察されます。そこには、日本の社会学の先駆者である田辺寿利や日本の民俗学の先駆者である柳田国男や、著明な思想家で、国際連盟の事務次長もした新渡戸稲造らの名前があり、著明な政治家の犬養毅が題字を寄せています。これらの人々に共通することは勇氣ある慈愛の先駆者であるということです。

また牧口は、中国からの留学生のための学校で講師をし、交流を深めていますが、投獄されても、その看守とも対話を重ねるなど、自他に開かれた対話を重んじながら、どこの場でも豊かな学びの人間関係を結んでいます。

このような牧口の人生の在り方を貫く、交流、対話、学び、社会貢献は、その弟子である戸田、そして創価大学の創立者でもある、池田にも継承されております。

創価大学の創立にあたって、池田はモットーを寄せていますが、それには「英知を磨くは何のため君よそれを忘るるな」そして「労苦と使命の中にのみ、人生の価値（たから）は生まれる」とあります。このモットーは、池田が牧口・戸田から継承した、創価教育の魂であると私は考えております。

そして今、その未来への継承は、私たちに託されております。牧口の人生の在り方に象徴される、世界中の人々との交流、対話、学び、貢献が、創価教育の根幹に今後とも脈打っていくようにしていく使命を強く感じるものです。